

Title	書評 Ernie Lepore & Kirk Ludwig, Donald Davidson: Meaning, Truth, Language, and Reality (Oxford University Press, 2005, xviii+446p.)
Author(s)	青山, 晋也
Citation	哲学論叢 (2010), 37(別冊): S167-S170
Issue Date	2010
URL	http://hdl.handle.net/2433/128964
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

書評

Ernie Lepore and Kirk Ludwig,
*Donald Davidson: Meaning, Truth,
Language, and Reality* (Oxford
University Press, 2005, xviii+446p.)

青山晋也

本書はデイヴィドソン哲学の解説書かつ研究書で、その目的を二つにまとめると、(1)デイヴィドソン哲学を筋道が見えるよう再構成すること、(2)それによってその哲学に対する誤解を解消することにある。

この書評ではデイヴィドソン哲学の中でも、特に誤解が多いとされる二つのトピック、意味論として真理論を用いるアイデア(「真理条件意味論」と、言語は存在しないという主張の真意について取り上げる。

本書は第一章が真理条件意味論を歴史的に紹介する章になっている。著者によれば、デイヴィドソンが真理論を意味論として用いるのは、あくまで真理論に(いくつかの適切な制約を課すことで)意味論としての役割を果たさせるためである。つまり、その試みにおいて標準的な意味概念は保持されている。

こうした試みに対して、次のような誤解が存在する。すなわち、デイヴィドソンが真理論を意味論として用いるのは、標準的な意味概念は混乱したものであるとして捨て、それをより厳密な概念に置き換えるためだという考えが存在する。この誤解において

真理論は意味論に代わるものとして考えられているため、著者はこのように理解された真理論を「置き換え理論」と呼ぶ。

デイヴィドソンの試みが「置き換え理論」と理解される原因として挙げられるのが、ある文の外延的に適切な真理条件を知ることがその文の意味を知ることだという彼の主張である。つまり、単に外延的に適切な真理の定義があれば、それで意味論として十分だというわけである。

こうした理解を裏付けるのは次のような彼の主張である。すなわち、外延的に適切な真理条件を述べる真理論において、「雪が白い」が真なのは草が緑のときまたそのときに限る、という真理条件文が(実際には帰結しないが)もし帰結したのなら、それは真理論が意味の概念を捉えそこなっているからではなく、意味の概念にそれ以上捉えるべきものがないからだという主張である。これは標準的な意味概念の拒否と誤解されてもおかしくない。

しかし、そうした理解は誤っていると著者は言う。そのことを示すために、デイヴィドソンが真理条件意味論で達成しようとする目標の変化に対応させて「初期のプロジェクト initial project」と「拡張されたプロジェクト extended project」という区別が導入される。

初期のプロジェクトでは、ある言語に対して合成的な意味論を与えることが目標であるとされる。つまり、私たちはどのようにして、文を構成する部分の意味にもとづ

いて、そうした複合的な表現の意味を理解するのかを明らかにする意味論を与えることが目標であった。

初期のプロジェクトで特徴的なのは、合成的な意味論を与えることが目標であり、特にそのために文（などの複合的な表現）を構成する部分の意味は前提できることだ。

拡張されたプロジェクトでは、それに加えて文の意味に限らず、そもそもある言語に含まれるあらゆる表現がその意味することを意味するとはどういうことなのかを説明するという目標をもつ。

拡張されたプロジェクトで特徴的なのは、合成的な意味論を与えるにあたって真理（と指示と充足）以外に意味論的な概念を使うことができないことである。これによって、文の意味を与える際にその構成部分の意味を前提とすることはできなくなる。

このような区別を導入したうえで、著者が指摘するのは、もしデイヴィッドソンが初期のプロジェクトを達成するためであったのなら課す必要のない制約を真理条件意味論に課している、ということである。もちろんそれは拡張されたプロジェクトにおいて達成されるべき目標のためであるのだが、問題はそうした制約を課すことで真理論がどのようなものとなるのかにある。

デイヴィッドソンがそうした制約を課するのは、「真理論がまさにその自体で解釈的である」ためである。ここで「解釈的である」とは対象言語の各文に真理条件を与える文が、うまくメタ言語において対象言語の文

の翻訳を与えるような形となっているということである。先ほどの例でいえば「雪が白い」が真なのは、雪が白いきまたそのときに限る」という形になる。

このように、拡張されたプロジェクトにおいて目指されるのは「解釈的真理論」なのである。この解釈的真理論とは、つまり真理論が適切な制約を課されることで意味論の役割を果たすようになったものと言える。したがって、デイヴィッドソンは真理論を「置き換え理論」としてではなく、標準的な意味概念を解明するために用いたのだと著者は結論する。

次に、言語は存在しないというデイヴィッドソンの主張に移ろう。これに対する誤解は、「言語が存在しないのなら、デイヴィッドソンがそれまで言語に関して行ってきた考察（意味論として真理条件意味論を用いるなど）はその主題を失うことになる」というものである。一言でいえば、デイヴィッドソンは自分で自分の仕事を無にしてしまっているということになる。

これに対して著者は、その主張においてデイヴィッドソンが標的としている「言語」（以下「言語」）を明確にすることで、その誤解を解消しようとする。デイヴィッドソンが標的とするは、（１）コミュニケーションに先立って習得され、（２）その参加者によって共有され、（３）規約的な性格をもっている、という三つを満たすものである。

このように定めた上で、デイヴィッドソンが示そうとするのは、この「言語」がコミ

コミュニケーションの成功に必要でも十分でもないことである。ただし注意しておくべきことは、こうした結論が解釈に先立つ規約的な知識の有用性や重要性を否定するものではないということである。実際デイヴィドソンはこのことを否定しない。ここでの彼の主張は、コミュニケーションの成功とは、ある発話に対して、話し手と聞き手がその発話の実際の解釈の仕方で一致することに尽きる、ということである。

著者はデイヴィドソンの議論を「言語」を使って次のように再構成する。デイヴィドソンは個人の言語を、規約を伴う公共言語（「言語」）より概念的に先行するものと考え、公共言語を諸個人言語からの抽象物とする。各個人はこのように理解される「言語」をもっており、見知らぬ人と話すときなどには、発話の解釈の取っ掛かりとしてとりあえずデフォルト的に使う。しかし実際に発話を理解し、会話が進んでいくと「言語」はその話し手の言葉の使い方に合わせて修正されていく。実際に発話を理解するのに使われるのは、このように各話し手の発話に対して修正された個人言語である。

さてここまでで、話し手がある言語を話すということを否定するものは何もないだろう。というよりは、むしろ抽象化された「言語」をもう一度個人言語へと戻したと理解できるかもしれない。では「言語」はどうなのか。確かに「言語」はデフォルトで使われるかもしれない。しかしそれがなければ、解釈が成立しないとはデイヴィド

ソンは考えない。それは有用だが必要なものではないのである。また「言語」は実際の解釈においては修正されるのだから、コミュニケーションに十分なものでもない。以上より、「言語」がコミュニケーションの成功に必要でも十分でもないとなる。

このことから、著者はデイヴィドソンの立場は特定の「言語」というものを攻撃するのであり、言語全般を否定するものではないと結論する。つまり、デイヴィドソンの言語に関する考察は依然としてその主題を保持し続けているというわけである。

さてここまでは真理条件意味論と「言語は存在しない」という二つのトピックを中心に見てきた。この二つの議論は本書では非常に綿密に行われており、これらのトピックに関して問題とされた誤解を解消するのに十分である。しかし、デイヴィドソンの議論を再構成し、その哲学がもついくつかの柱を提示するという意味（(1)）では不満が残る。例えば、本書において真理条件意味論の歴史的な紹介の後に、第二章でデイヴィドソンの哲学で重要な用語である「根元的解釈」の説明が来る。根元的解釈の議論は真理条件意味論が意味論として機能することを具体的な解釈の場で示そうとするものなので、当然と言えば当然である。しかしこれが真理条件意味論を理解する上で最良の道筋だとは限らない。

ここではデイヴィドソンの描く解釈のプロセスという観点から彼の哲学を別の形で再構成する方針を示し、本書において不足

しているポイントを指摘しよう。

確かに彼が考える解釈のプロセスを描く上で重要となる道具立ては確かに真理条件意味論である。それゆえそれを初めに説明することは自然に思える。しかし、まず私たちが話し手の発話をどのように理解すると彼が考えているのかをある程度見ておいた方が、真理論を意味論として用いる眼目や、真理条件意味論とデイヴィッドソン哲学の他の議論とのつながり、つまり彼の哲学の全体像を理解しやすくなる。これが本書に不足している部分である。

例えば、解釈のプロセスを次のように、幼児が母語を習得する場面から描き始めてみる。このような状況設定下では、明らかに意味を前提とした理論は幼児がどう文の意味を理解していくのかということに説明を与えることはできない。それゆえ、意味を用いない異なる説明が要求されるが、この候補としてどのようなものがあるのか。幼児が利用できるのは他者の音声（発話）と世界で成り立っている事柄だけである。すると次のように考えられないであろうか。すなわち、幼児は発話を聞くと世界で成り立っている事柄をその発話の内容として与えているのではないかと。もしこうした形で言語習得の初期の段階が進むのだとしたら、そのことを説明する理論は、ある発話がなされた時、世界で何が成り立っていないかを示すものとなる。そしてその理論の候補として真理条件意味論が登場してくることになるのである。

（このことはこれに続けて根元的解釈の場を説明すればさらにわかりやすくなる。）

こうした議論は後期の「三角測量」という考え方などに見られるもので、本書では最終章のしかも最後に、別の文脈（言語と思考の関係）で少し触れられるだけである。しかしデイヴィッドソン自身は、真理条件意味論が幼児の言語習得の説明にもつ有用性を論じていることを考えれば、その関係に触れないのはおかしいだろう。

またこうした描き方はデイヴィッドソンの言語は存在しないという主張（本書では二章の最後）を理解する手助けともなる。なぜなら、初めに解釈者が意味を前提にせずにある個人の話し手の発話を理解する場面を見ておけば、デイヴィッドソン哲学の初期における真理条件意味論の対象が解釈者の解釈の現場から切り離された一般的な「言語」であることがより明確になるからだ。このような形で、解釈者が話し手の発話を理解する文脈において考えられている言語と、初期の真理条件意味論の対象である一般的な「言語」とを対比することができれば、デイヴィッドソンの「言語」批判で問題とされる論点がつかみやすくなる。

このように、デイヴィッドソンの哲学の再構成という意味では不満が残るが、各章における議論は綿密でデイヴィッドソンの時として簡素な議論を補ってもあまりあるほどである。デイヴィッドソン哲学全体の解説書が少ない中、彼の哲学を知る上でこれは貴重な本となるだろう。